

2020 東京オリンピック IN 札幌

渋谷 俊浩¹⁾

2020 Tokyo Olympic Games in Sapporo

Toshihiro SHIBUTANI

Key Words : Marathon, Project of Strengthening Strategy for Olympic Games, Marathon Grand Championship Series, Japan Marathon Championship Series

キーワード : マラソン, 強化戦略プロジェクト, MGC (マラソングランドチャンピオンシップ), JMC (ジャパンマラソンチャンピオンシップ)

1. はじめに

思い起こせば8年前の2013年9月7日(日本時間9月8日早朝), アルゼンチンの首都ブエノスアイレスでのIOC総会において, 「2020年オリンピック開催地決定」の発表がなされようとしていた。偶然にも別件で東京駅近くのホテルに宿泊していた私は, ほぼ一睡もできず, 大きな期待と少しの不安を胸にTV中継を見つめていた。

中学1年生から陸上競技長距離に取り組み, 以降30年近く現役を続けた私にとって, 「オリンピック出場」は夢であると同時に大きな目標であった。当時, 2度のオリンピック(1988年ソウル, 1992年バルセロナ)マラソン代表選考レースでは, 残念ながら力及ばず「オリンピック出場」を果たすことができなかったが, 自身が陸上競技に携わらせていただいている間に自国開催のオリンピックが巡ってくるとは…。前IOC会長ジャック・ロゲ氏(故人)の「Tokyo!」を聞いた瞬間, 思わず招致メンバーにも負けないくらいの歓喜の声をあげてしまった。あまりの興奮に居ても立ってもいられなくなり, ランニング

ウェアに着替えて走り出した。「何かこの日の記念を」と考え, 東京駅と国立競技場駅で「切符」(写真1)を購入した。(この切符は今でも財布にしまっている, 大切なお守り?である)

また, この日から私には新たな目標ができた。『びわスポから東京オリンピックへ』=自分自身はもちろん, 多くのびわスポ関係者(学生・OG・OB・教職員)が東京オリンピックに出場・参画することである。以来, 各種授業(入門系・コーチング系, 図1)やクラブ活動を通じて学生・関係者に伝え続けてき



写真1 購入した切符

1) スポーツ学部

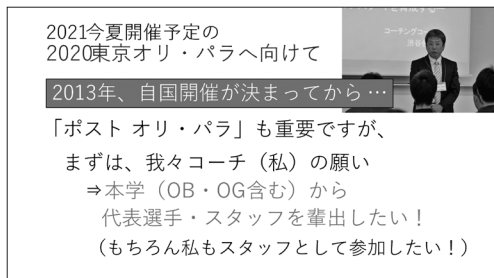


図1 授業で用いたスライド

たのだが、「オリンピックなんて無理」「ポスト・オリンピックを検討した方がよい」など、その頃の周囲の反応はやや冷めたものが多かった。気付いておられた方も多いと思うが、東京オリンピックが決まった瞬間に日本で最初にTV放映された大学は（私の記憶が正しければ）「日本体育大学」であった。これまでも多くのオリンピック・メダリストを輩出してきて、体育・スポーツ界の超名門大学である。その歴史と実績には到底及ばないものの、何とか東京オリンピックのページに、日本で初めて大学名に「スポーツ」を冠し、「新しいスポーツ文化の創造」を標榜する「びわこ成蹊スポーツ大学」の名を刻みたい、私にとってはおそらくラストチャンスとなる今回こそは（現役時代に果たせなかった）目標を達成したい、2016年まで思いは募る一方であった。

そして2017年、光栄にも日本陸上競技連盟（以下、日本陸連）から東京オリンピックのお手伝い（2020東京オリンピック強化戦略プロジェクト 男子マラソン・長距離コーディネーター）のチャンスを与えていただいた。さらには、2019年からのコロナ禍を経た2021年4月、本学8期生の丸尾知司君がオリンピック代表最終選考会である2021全日本輪島50km競歩で見事優勝し、『日本代表』としてオリンピックに出場することとなった。

以下、本稿は2017年のプロジェクト参画から2021年本番のレースまで、サポートス

タッフ（コーディネーター）として目の当たりにした、札幌で開催された「2020東京オリンピック マラソン競技」に関する一連の報告である。

2. 日本マラソン復活への道筋

2-1 日本男子マラソン界の動向

表1に、2001年から20年間の日本男子マラソン界の動向（国際主要大会での成績・日本記録の変遷）を、図2に上記期間の年度別ランキングトップ10の記録の推移を示した。

これらからわかるように、日本男子マラソン界は1991年東京世界選手権での谷口浩美選手の金メダル、1992年バルセロナオリンピックでの森下広一選手の銀メダル以来、国際主要大会において4-8位入賞はあるものの、メダル獲得からは長らく遠ざかっており、東京オリンピック開催決定後に迎えた2016年リオデジャネイロオリンピックにおいても、日本代表は残念ながら入賞にも程遠い結果に終わっていた。

また、同期間の記録の分布と推移を見ても、「ランキングTop10平均記録」および「サブ10（2時間10分を切った選手＝マラソンの競技力の指標）人数」など、国際大会での成績と同様に低下・停滞傾向を示していた。

2-2 マラソン強化戦略プロジェクト発足

2016年11月（リオオリンピックのわずか2か月後）、このような状況を打破し日本マラソン界再興を図るため、日本陸連は「マラソン強化戦略プロジェクト」を立ち上げ、その大きな使命を瀬古利彦リーダー・河野匡ディレクター（後に坂口泰男子強化コーチ・山下佐知子女子強化コーチも参画）に託したのである。

マラソンに興味関心のある方はご存じだろうが、瀬古リーダーは1980年代初頭日本のみならず世界のトップに君臨した往年の名マラソンランナーであり、河野ディレクター・坂口男子強化コーチ・山下女子強化コーチも

表 1 マラソン小史 (2000-2021)

年	オリンピック		世界選手権		アジア大会		その他 日本記録の変遷	sub.10 (人)
	開催地	成績	開催地	成績	開催地	成績		
2000	シドニー	川嶋21, 佐藤信41, 伏見DNF					2:06.51 藤田	
2001			エドモントン	油谷5, 森下由8, 西田9, 藤田12, 高橋健26				6
2002					釜山	清水康2, 武井3	2:06.16 高岡	7
2003			パリ	油谷5, 佐藤敦10, 尾方12, 清水康21,				16
2004	アテネ	油谷5, 諏訪6, 国近42						8
2005			ヘルシンキ	尾方3, 高岡4, 奥谷14, 入船20, 細川48				2
2006					ドーハ	大崎3, 入船4		2
2007			大阪	尾方5, 大崎6, 諏訪7, 佐藤智13, 久保田56				8
2008	北京	尾方13, 佐藤敦76, 大崎 DNS						1
2009			ベルリン	佐藤敦6, 清水将11, 入船14, 前田39, 藤原60				1
2010					広州	北岡2, 佐藤智7		5
2011			大邱	堀端7, 中本10, 川内18, 尾田29, 北岡38				8
2012	ロンドン	中本6, 山本40, 藤原45						7
2013			モスクワ	中本5, 藤原正14, 前田17, 川内18, 堀端 DNF				8
2014					仁川	松村2, 川内3		6
2015			北京	藤原21, 前田40, 今井 DNS				5
2016	リオデジャネイロ	佐々木16, 石川36, 北島94						5
2017			ロンドン	川内9, 中本10, 井上26			MGC 導入	14
2018					ジャカルタ	井上1, 園田4	2:06.11 設楽, 2:05.50 大迫	10
2019			ドーハ	山岸25, 川内29, 二岡37,			MGC 実施	31
2020	(東京)						2:05.29 大迫, 2:04.56 鈴木	47
2021	*東京	大迫6, 中村62, 服部73	札幌					
1992: パルセロナ		森下2	1991: 東京		谷口1			

* 名前右の数字は順位, DNF・DNS = 棄権

自身の輝かしい競技成績に加え、マラソン日本記録保持者や数多くのオリンピック・日本代表選手を育成した実績を有している。

さらには、このメンバーに日本陸連科学委員会（杉田委員長）・同医事委員会（山澤委員長）がそれまで以上に強力なサポートすることとなり、言わばこのプロジェクトチームは日本マラソン界の「英知」を結集した、真正正銘の「スペシャル」チームとなったのである。

2-3 MGC 創設：東京オリンピックマラソン代表選出

以降、このスペシャルチームの動きは精力的かつ迅速であった。TVドラマ化されるまでに至った「MGC（マラソングランドチャンピオンシップ）創設」は、マラソン界のタブー？を取り払い、「選考レースを一本化する」までには至らなかったが、過去に数々の遺恨を生んだ「オリンピックマラソン日本代表選考」方策を抜本的に改革し、言わば「マラソン界のパラダイムシフト」を起こした。このMGC創設によって代表選手選考が透明化され、方法・基準が明確になったことで、強化現場（選手・コーチ等）サイドもよりの

確に計画性をもって強化に取り組めるようになった。

加えて、プロジェクトチームでは定期的な選手・指導者研修会を開催し、プロジェクトメンバーが現場の選手・コーチと直接的にコミュニケーションをとることで関係者の意識改革・意思統一に努め、加えて2018年8月にはJISS・NTCにおいてオリンピックマラソンレース当日のシミュレーションを兼ねて「暑熱対策測定合宿」を実施するなど、心身両面から着々と「最強のオリンピックマラソン代表選出」へ向けて準備を進めた。

そして、2019年9月15日（日）MGC本番、オリンピックとほぼ同じコースで男子30名・女子10名の精鋭が、それぞれ2つの代表枠獲得をかけてスタートを切った。（同レースは男子をNHK、女子をTBSの2局が異例の同時中継を行い、関東地区の視聴率は男子16.4%・女子13.5%・計29.9%と大きな注目を集めた。）

その結果、男子では1位の中村匠吾選手と2位の服部勇馬選手が、女子では1位の前田穂南選手と2位の鈴木亜由子選手がオリンピック代表に内定した。さらに2020年3月8日、残り1枠をかけた「MGCファイナル

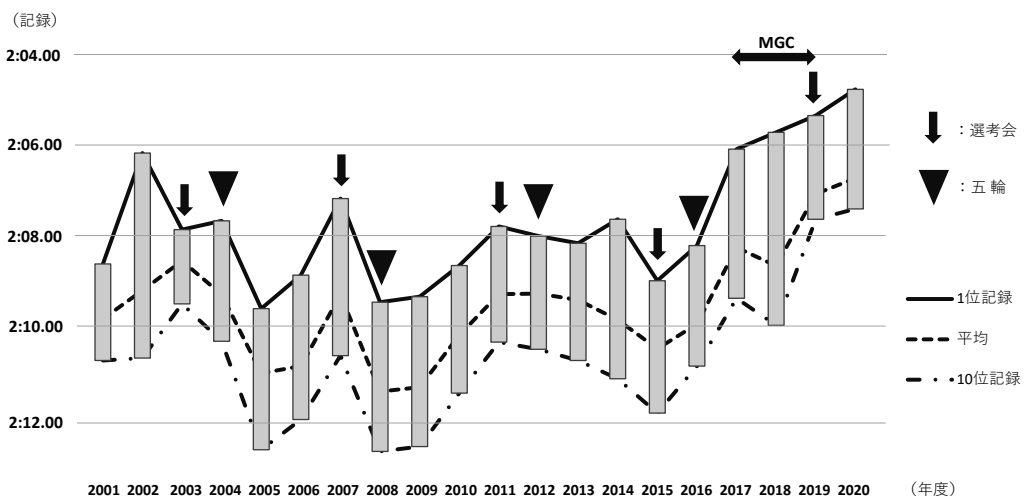


図2 年度別日本マラソンランキングTOP10（男子）の記録の分布と推移（2001-2020）

チャレンジレース」優勝者の中から、最速タイムを記録した大迫傑選手（当時日本記録の2時間5分29秒）と一山麻緒選手（女子単独日本記録・アジア記録の2時間20分29秒）が堂々と代表に内定し、同時に男女補欠各2名が決定した。

また、これらを含めたMGC期間(2017-2019年)における男子マラソン全体のレベルアップ(サブ10の増加)および記録向上は、3度の日本記録更新を含めた驚異的にハイレベルなものとなり(表1・図2)、自国開催のオリンピックを契機に「日本マラソン復活」への道筋が定まったことが推察される。

3. 2020 東京オリンピックへ向けて

3-1 マラソン開催地・コース変更

MGC終了後にドーハで開催された陸上世界選手権マラソン競技において、予想以上の酷暑による多数の棄権者・体調不良者が出たことを受け、2019年10月IOCは「選手・関係者の安全面・健康面に配慮して」という事由で、マラソン・競歩競技の開催地を「東京」から「札幌」に変更した。あまりに突然のことで、多くの選手・コーチの協力のもと、プロジェクトチーム(科学委員会・医事委員会等)がそれまでに積み上げてきた貴重なデータ(東京のコースに特化した生理学的データ等)が一瞬にしてふいになってしまった。後に関係者が「我々の長年の取り組みがこんなに簡単に覆るとは…」と語っているように、プロジェクトチーム・選手・コーチには忸怩たる思いが残ったが、即座に札幌コース対応に切り替えたのであった。

3-2 オリンピック開催延期

さらに今回のオリンピックマラソンには悲劇が襲った。2019年末、誰も予想しなかった事態が世界を・日本を、そしてオリンピックを直撃したのだ。新型コロナウイルスのパンデミックである。

詳細は割愛するが、前章で述べた「MGC

ファイナルチャレンジレース」も無観客・参加者制限の条件下で何とか開催されるなど、多くの大会が中止・延期を余儀なくされ、ついには2020年3月24日(戦争以外の事由では)史上初の「オリンピックの1年延期」が決定されてしまった。

強化の現場は混乱した。先を見通せない不安・焦り、特に代表に内定していた選手(補欠選手含む)・関係者はどのような思いで日々を過ごしていたのだろうか。その心中を察すると、サポートの立場である私でさえも胸が締め付けられるような思いに駆られ続けた。

しかし、このような状況でもプロジェクトチームは歩みを止めなかった。代表内定直後の2020年3月13日(オリンピック男子マラソンのスタートまで149日)には、復興オリンピックであることもふまえ、福島県においてマラソン・チームジャパンの内定記者会見と研修会を実施した。期間中には、参加者全員で前回の東京オリンピック男子マラソンで銅メダルを獲得された円谷幸吉氏の墓参りをし、オリンピックでの健闘を誓った。また、この研修会では大会本番へ向けての強化方針として「今後はチームジャパンの意識を持ちながら、選手個々が最適と考えるプロセス・方策を採っていく」こと、そのために日本陸連・プロジェクトチームはできる限りのサポートをしていくことが確認された。

3-3 コロナ禍の2020年

本来はオリンピックイヤーであった2020年、特に年度前半はコロナが猛威を振るった。2019年度後半と同様に多くの大会が中止・延期となり、開催に踏み切った主要大会でも「無観客・参加者制限」が原則となった。また、コロナ前までは(当たり前)実施することができた海外遠征・合宿等も中止となり、代表選手・チームの強化活動は大きな影響を受けることとなったが、プロジェクトチームにおいてはリーダー・ディレクター・強化コーチが手分けして各選手の練習拠点を訪問した

り、オンラインで相談に乗るなど、科学委員会・医事委員会との連携を含めて、引き続き「チームジャパン」として本番までのモチベーション維持に努めた。

これらの対応の甲斐もあり、代表選手はトラックレース・ハーフマラソンなどのロードレース・駅伝レース出場などを通じた強化に、また細部の懸念事項解消・コンディショニングに努め、全選手が概ね順調に2020年を過ごせたものと推察する。

[参考]

後の日本陸連報告「2020年度の競技会開催実態調査まとめ」(2021)によると、回答のあった50団体すべてが「感染拡大防止ガイダンス・ガイドライン」等を策定し、万全の対策をとって競技会を実施した結果、競技場での競技会は当初予定の48.9%(1644大会)が開催され、参加者(競技者・役員・審判等)延べ110万人余りのうち競技会終了後2週間以内の新型コロナウイルス感染者の報告は1件、ロードレースでの競技会は当初予定の46.1%(101大会)が開催され、参加者延べ6万1000人余りのうち感染者の報告は2件で、競技場・ロード併せて1745大会中の感染者の報告は3件(0.17%)のみであった。

4. 2021年オリンピックイヤー

4-1 オリンピック参加決定

迎えた2021年オリンピックイヤー、コロナの影響についてはまだまだ予断を許さない状況であったが、4月に強化コーチから「8月の札幌でのオリンピックマラソンサポート」について非公式ながら連絡をいただいた。それまでも「感染予防」については人一倍注意を払ってきたが、「オリンピックに参加できる」ことに改めて身が引き締まる思いで、授業・学務・クラブ指導・学連活動はもちろん、日常生活においても家族があきれるほど「感染防止策」を徹底した。

そして7月、日本陸連から正式に「札幌会場支援スタッフ(7/31-8/9)」として派

遣する正式文書が届き、ついに積年の目標であった「オリンピックへの参加」が叶うこととなった。その後、「絶対に大丈夫」と思いつつも、結果が出るまでは気が気でなかった現地入り72時間前のPCR検査も「陰性」を示し、晴れて札幌に向かうことができた。

4-2 札幌会場での活動状況

(レース前：7/31-8/4)

7月31日、伊丹から単身札幌会場入りし、いよいよ現地でのマラソン・競歩チームのサポート活動が始まるのだが、この出発時にもちょっとしたハプニングがあった。統括マネージャーから連絡があり、選手の1名が濃厚接触者になった(本体とは別行動になった)こと、さらにはPCR検査の不手際で選手1名の入国および選手村入り日程が急遽変更になることが知らされた。まさに、コロナ禍でのオリンピックなのだ実感させられることとなった。

千歳空港からはレンタカーでサポートスタッフの宿舎へ移動、直ちにNTOに出向い



写真2 ADカードと検査キット

てADカード(写真2)を作成していただいた。東京会場と同様に、札幌会場も「バブル方式」が導入されていたからか、一般市民の雰囲気からは「オリンピックが開催される」というような華やいだものは感じられなかった。加えて、選手・関係者の安全を考慮して「東京より涼しい札幌」に会場変更したにもかかわらず、札幌は「100年ぶりの猛暑」に見舞われ、過去に札幌で何度も夏合宿を行った経験のある私自身も、率直に「暑い!」と感じる天候が大会期間中は続くというデータが提供された。海外メディア・選手・スタッフからも「ここは東京か?いや、東京よりも暑い!」とのコメントが出るなど、「暑さ」がレースに重大な影響を及ぼすことが懸念された。

レースまで、我々サポートスタッフ(マラソンコーディネーター)の主な役割は、選手・スタッフが選手村ホテルに入るまでの期間、PCR検査の検体回収と検査所までの輸送、事前合宿地(千歳市)および移動時の送迎等であり、何をさておいても「選手・スタッフ全員が無事にレースを迎えること」を主眼に活動した。この間、チームドクターと立ち寄った千歳の競歩チーム宿舎で本学OBの丸尾選手と面会する機会があり、短い時間ではあったが言葉を交わした。表情からは、多少緊張が高まってきたようではあるものの、一番を控えた時の丸尾選手らしい「静かな闘志」を感じる事ができた。

そして8月5日、早朝7:00スタートの女子20km競歩を皮切りに、「札幌での2020東京オリンピック」が始まった。

4-3 2020東京オリンピック競歩・マラソンレース(8/5-8)

コロナ対策として、今回のオリンピック競歩・マラソンレースでは沿道での観戦・応援自粛要請が発出されていたため、競歩レースについては後方支援に当たった。

・8/5:女子20km競歩, 男子20km競歩

7:00スタートで、女子20km競歩が実施された。入賞が期待されたが、藤井菜々子選手が13位、岡田久美子選手が15位、河添香織選手が40位と、世界とは力の差があることが明らかとなった。

16:30スタートで、金メダル・複数メダル獲得が期待された注目種目である男子20km競歩が実施された。積極的なレースの結果、池田向希選手が銀メダル、山西利和選手が銅メダル獲得という見事な成果を残した。(高橋英輝選手は32位)

・8/6:男子50km競歩

5:30スタートで、男子20km競歩と同様に金メダル・複数メダル獲得が期待された男子50km競歩が実施された。(ちなみに、国際陸連の種目変更により、国際主要大会における50km競歩はこのレースが最後となる)特に、本学OBの丸尾選手はその時点での同種目世界ランキング1位ということで、スタート前に全出場選手を代表して紹介されるなど、その雄姿を間近で見ることができ、私自身も感慨ひとしおであった。

一方で、スタート前の気温が直射日光が当たる場所ではすでに29℃超(スタート地点は25℃)・湿度86%と、この気温と湿度がレースに影響を与えることは必至であった。

実際のレース自体は穏やかな流れで進んだが、3人それぞれに不調・アクシデント等があり、念願のメダル獲得はならなかった。その中で、川野将虎選手が後半粘って6位入賞を果たし、日本競歩の伝統・プライドを死守してくれた。以下、勝木隼人選手30位、丸尾知司選手32位であった。丸尾選手もゴール後は憔悴しきった状況であったが、本人がレース後にコメントしたように、ぜひとも次の「2024年パリオリンピック」での挽回を期待したい。

◆8/7:女子マラソン

レース前日の6日19時過ぎ、統括マネージャーから「明日の女子マラソンのスタート時間が変更された」との連絡があった。概要

は、競歩レースの状況（コンディション）をふまえ、「選手の安全」を主旨に世界陸連メディカルチームがアドバイスしたとのことであった。オリンピックのような国際レベルのレースにおいて、しかも翌日のスタート時間に合わせてすでに多くの選手が就寝している時間帯での「スタートの1時間の前倒し（7:00⇒6:00）」は前代未聞であった。当然ながら現場は混乱したが、日本チームの「アスリートセンター」のポリシーのもと、各選手とそのコーチングスタッフとの連携、およびスケジュールの組み直しと周知徹底等、限られた時間の中で最善を尽くした。

コーディネーターとして、主担当の男女マラソンにおいては別途P（Personal Refreshment Station）用ADカードを配布され、給水係を担当した。今回のような高温多湿環境下でのマラソンレースにおいて、「給水」は選手のパフォーマンスを左右する（決定するといっても過言ではない）非常に重要なポイントであるため、ミスは許されない。何としても「選手が設定した状態（飲料の温度・内容物等）で、タイミングよく確実に渡す」ことに集中しようと決めた。

レース当日は、夜明け前の3時から選手村ホテルにてポイントごとのボトル振り分け、03:30選手村をバスで出発、04:00競技エリア到着、04:45給水提出完了・各地点（A, B, C, D, E）行きバスに集合、05:00給水ポイントへバス出発、担当のDステーション（周回コースのため16.3km, 26.3km, 36.2km地点）到着後、ペアの坂口強化コーチと協力してただちにテーブルのセッティングに取り掛かった。国際大会では、給水テーブルは国名のアルファベット順に設置される。女子の場合は、選手の走行方向から見て手前がイタリア（I）、そして日本（J）、後ろがカザフスタン・ケニア（K）という並びであった。（写真3）

6:00にレースがスタート、ポータブルTVとスマートフォンで実況を視聴しながら



写真3 給水地点の状況

選手の通過を待った。たまたま、ポータブルTVを準備していたのが日本チームだけであったため、ケニア・イタリア等各国コーチと一緒に、片言の英語で交流しながら戦況を見守ることとなった。レース序盤、ケニアチームのコーチは「メダル独占」を宣言するなど、非常に自信にあふれていた。

レースでは、スタート時の気温25℃・湿度84%、ゴール時の気温29℃・湿度67%と高温多湿環境下で、想定通り「暑熱対策（競歩チームが活用した氷を入れて頭部を冷やすキャップの着用など）」「給水」の成否がポイントとなった。選手の「給水アイテム」は三者三様で、ボトルの形状・内容物とその濃度・設定温度などが細かく異なっており、それぞれのリクエストに応じて対応した。給水テーブルが見通しの良い直線道路に設置されていたため、選手が50m手間に来たら大声で名前を呼びコース誘導、直前で選手の視線（自身のボトルを視界にとらえているかどうか）を確認、走スピードを落とさないよう確実に手渡すことを繰り返し、3選手×3地点＝計9回の給水を無事終えることができた。

結果、コーチの宣言通りケニア勢が金・銀を獲得、35km過ぎに9位から順位を上げた一山麻緒選手が2.30.13で、日本選手としては2004年のアテネオリンピック以来の8位入賞を果たした。他、調整段階でややコンディションに不安があった鈴木亜由子選手と前田

穂南選手は、それぞれ 19 位と 33 位であった。

◆ 8/8：男子マラソン

男子マラソンは、当初の予定通りのスケジュール（7：00 スタート）で実施された。私は、女子レースから引き続いて給水の D ステーション（16.3km, 26.3km, 36.2km 地点）を担当した。

当日は、04：00 から選手村ホテルにてポイントごとのボトル振り分け、04：30 バス出発、05：00 競技エリア到着、05：45 給水提出完了・各地点（A, B, C, D, E）行きバスに集合、06：00 給水ポイントへバス出発、D ステーション到着後はペアの山下強化コーチと協力してテーブルをセッティングした。テーブルの並びは女子と同様で、イタリア・日本・ケニア（カザフスタンは出場無し）が隣り合い、日本チームのポータブル TV での観戦となった。（余談ではあるが、この時ポータブル TV がバッテリー切れとなり、ケニアチームのコーチが持ち合わせていたポータブルバッテリーを拝借して事なきを得ていた。）この日もケニアチームのコーチは余裕綽々で、「キプチョゲ選手（マラソン世界記録保持者、2016 アテネオリンピックマラソン金）が金、メダル独占」を宣言していた。

レースでは、スタート時の気温 26℃・湿度 81%、ゴール時の気温 27℃・湿度 73% と高温多湿環境下で、女子と同様に「暑熱対策（競歩チームが活用した氷を入れて頭部を冷やすキャップの着用など）」「給水」の成否がポイントとなった。男子選手の「給水アイテム」は女子選手ほど細かい設定は無く、「確実に渡してほしい」とだけリクエストを受けた。給水方法も女子と同様としたが、男子の方が走スピードが速いので、給水のタイミング・手渡しの時の衝撃の強さに十分配慮することを再確認して臨んだ。女子レース以上に緊張したが、何とか 3 選手×3 地点＝計 9 回の給水を無事終えることができた。（NHK NEWS WEB 2021.08.08. 参照）

レース自体、序盤は 40 人近い大集団で淡々

と進み、15km 過ぎで中村選手が、21km 過ぎで服部選手が遅れた。その後、25km 過ぎからペースが上がって先頭集団が大迫選手を含む 10 数名に絞られ、30km 過ぎからはキプチョゲ選手が独走態勢に入り、そのまま 2.08.38 でオリンピック 2 連覇のテープを切った。キプチョゲ選手の 25km～30km～35km～40km の 5km のスプリットタイムは 15.07 - 14.28 - 14.56 と、前述した過酷なコンディションではもはや異次元とも言えるスピードで駆け抜けたのである。給水テーブルが隣り合わせであることから、キプチョゲ選手を 3 回（16.3km, 26.3km, 36.2km 地点）間近で見ることができた。その時の彼には、レース展開・スプリットタイムにも表れているように「彼だけ別のレースを走っている？」「彼の周りだけ気温が 10℃ くらい低い？」ような、言わば「静かなオーラ」を感じた。特に 36.2km の給水では彼と目が合ったのだが、その目は「哲人」のように深く透き通っていて、「悟り」「達観」という言葉が思い浮かぶほどであった。

日本選手では、大迫傑選手が常に先頭集団で粘り、30km で集団がばらけてからは 8 位で前を追走、私が担当した 36.2km の給水ポイントでは前の 2 選手と 10 秒足らずの差まで迫っていた。本人に聞こえていたかは不明だが、山下コーチと 2 人で「前 2 人いけるぞ！」「6 位まで行くぞ！」と叫んだことを記憶している。その後、37km あたりで 2 人を抜き、2.10.41 で見事 6 位入賞を果たした。なんと、3 位とは 41 秒という僅差で、キプチョゲ選手以外は激戦であったことが窺える。また、日本人選手としては 2012 年ロンドン五輪 6 位の中本健太郎選手以来の入賞となった。さらには、大迫選手にとってこのレースが引退レースであり、ゴール後の「100 点満点の頑張りができた。」との彼のコメントには感慨深いものがあった。

他、女子と同様に調整段階で不安を抱えていた中村匠吾選手と服部勇馬選手は、それぞ

れ62位と73位であった。

4.4 マラソンレース振り返り

以上のようにして、8年にわたる「2020東京オリンピック マラソン強化プロジェクト」は一つの区切りを迎えたのだが、ここでマラソンレースを振り返りながら私なりの総括をしておきたい。

まず、代表選手選考方法の改編（MGCの導入）については、結果的に入賞した2名（一山選手・大迫選手）は最後に「3人目の代表」として選ばれた、当時の最も速い記録保持者であったことから、「オリンピック本番で必ず力を発揮できる、タイプの異なる強い選手を選ぶ」という趣旨は達成されたものと考えられる。加えて、オリンピック後に瀬古リーダーが話されていたように、今後は「スピードの重要性」がさらに高まることは間違いない。「本番に強く、暑さに強く、さらにスピードに優れている」選手の育成が急務である。

一方で、今後も国際主要大会が夏期に開催されるならば、今回のオリンピックマラソンレースにおいても女子は出場88人中15人が途中棄権、男子は出場106人中30人が途中棄権という実態を鑑み、これまで以上に「暑熱対策」についての取り組み（医科学分野等）を加速・深化させることが必要である。

また、近年ランニングシューズの進化が著しく、今回のレースでもN社をはじめとしたいわゆる「厚底シューズ」着用選手の活躍が目立った。参考までに、マラソン8位入賞選手の着用シューズを見てみると、男子では優勝のキプチョゲ選手をはじめとしてN社6名、AD社1名、AS社1名、日本選手は3名ともN社であった。女子では優勝のジェプチルチル選手を含めAD社3名、N社4名、P社1名、日本選手はN社2名、AS社1名という状況であった。このような状況も踏まえ、現在ではN社以外のスポーツメーカーの巻き返しが始まっている。

ちなみに、沿道での観戦・応援が自粛とさ

れた中、TVの平均視聴率（関東地区）は女子マラソン（8/7：日本テレビ）13.0%、男子マラソン（8/8：NHK）31.4%と報告されている。今回は異例の開催方式となったオリンピックまたマラソンであったが、視聴率が示す通り国民からは一定以上注目されている・期待されている？ことが推察される。東京オリンピックマラソンレースの余韻が残っているうちに、熱が冷めないうちに次の方策を推し進めていくことが重要である。

「暑さ」を含めて様々なことに翻弄されたオリンピックマラソンレースであったが、皮肉なことに、オリンピック後（日本チームが札幌を離れた翌日）の北海道は100数年ぶりの寒波に襲われたそうである。

5. レガシィ・今後の展望

オリンピック直後、日本陸上競技連盟はマラソン活性化の新たな構想（2021.06.21.）として、MGCを継承・発展させた「JMC（Japan Marathon Championship）シリーズ」を打ち出した。2022年の世界陸上（ユージーン：アメリカ）以降、2023年：世界陸上（ブダペスト：ハンガリー）、2024年：パリオリンピック、2025年：世界陸上（東京？）、2026年：アジア大会（名古屋）と、マラソン界は毎年ビッグイベントを控えている。MGCで起こしたマラソン界の革命とその成果（数度の日本記録更新やサブ10の増加、オリンピックマラソン入賞等に代表されるレガシィ）を、ぜひとも未来に繋げていただきたい。

一方、このような華やかな一面とは裏腹に、びわ湖毎日マラソン（例年3月に滋賀県大津市で開催）・福岡国際マラソン（例年12月に福岡市で開催）等の格式ある伝統レースが終了する、未だコロナ禍の影響で大会が中止・延期になるなどの事態も散見される。1980年代からのランニングブーム、そして1990年代からのマラソンブームによって乱立した各種マラソン・ランニング大会が、ついに淘汰されていく時代が来たのである。

経営の世界では「機（タイミング）を見て変化に対応する（できる）ものが生き残る」と言われるそうである。尾縣会長のもと、新たなメンバーを加えて編成された日本陸連強化委員会には、日本陸上界・マラソン界のみならず、世界の動向を見極めた改革を断行していただき、近い将来、これまでマラソンに関わってきた多くの関係者の悲願である「メインポールに日の丸を」という夢がかなうことを期待して本稿のまとめとしたい。

引用・参考

遠藤俊典・山崎一彦・河野匡・麻場一徳（2021）第32回オリンピック競技大会（2020/東京）報告. 陸上競技研究. 126：35-44.

NHK NEWS WEB オリンピック【詳細】男子マラソン 大迫傑が6位入賞（2021年8月8日 21：55）

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210808/k10013188341000.html>

（2022年1月12日閲覧）

日本陸上競技連盟（2019）東京2020オリンピック競技大会マラソン日本代表選手選考要項.

https://www.jaaf.or.jp/files/upload/201905/29_154049.pdf（2021年10月29日閲覧）

日本陸上競技連盟（2019）マラソングランドチャンピオンシップ Official Site「MGCとは」.

<http://www.mgc42195.jp/mgc/>（2021年11月2日閲覧）

日本陸上競技連盟（2021）ジャパンマラソンチャンピオンシップシリーズ（JMCシリーズ）関連資料「マラソン活性化の新たな構想について」

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1632/>（2021年11月3日閲覧）

日本陸上競技連盟（2021）2020年度の競技会開催実態調査まとめ～新型コロナウイルス感染拡大による2020年4月～2021年3月までの競技会～〔2021年6月2日回答

時点〕.

https://www.jaaf.or.jp/files/upload/202105/14_173742.pdf（2021年11月16日閲覧）

渋谷俊浩（2019）スポーツ大学における競技スポーツの検証：陸上競技部16年間の活動を振り返って. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第16号：37-47.

World Athletics（2021）TOP PERFORMANCES「World Leading Athletes：Men's Marathon」

<https://www.worldathletics.org/records/toplists/road-running/marathon/outdoor/men/senior/2021?regionType=world&drop=regular&fiftyPercentRule=regular&page=1&bestResultsOnly=true>（2021年2月12日閲覧）